第　41　号

県中教研
特別活動部会だより

発 行 日　令和8年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　山本　隆資
題　　字　金山　泰仁　先生

なすことによって学ぶ

指導主事　村田　夏樹

本年度の研究主題の副題には、「粘り強く実践できる生徒の育成を目指す」ことが明記されています。学級活動において育成を目指す資質・能力は、合意形成や意思決定を行う話合いのみならず、決めたことの実践や振り返りまでの学習過程を繰り返す中で育まれます。研究大会の授業では、生徒が集団や自己の生活上の課題を明確にし、実践までの見通しがもてる工夫がなされていました。

東部地区大会では、学級活動(1)において生徒会活動との関連を図り、議題「みんなで見直そう！わたしたちの校則～ルールをよりよいものに～」で話合いが行われました。よりよい生活を築くために、自分たちできまりを見直す話合いが展開されました。西部地区大会では、学級活動(3)において、総合的な学習の時間や「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」での経験を生かし、生徒は学ぶことの意義や将来の職業とのつながりについて考えを深めていました。また指導計画には、実践して振り返り、次の実践へとつなぐ過程が明記されていました。

このように、学級活動のそれぞれの学習過程で、生徒が繰り返し自主的、実践的な活動に取り組むことが大切です。実践的な活動とは、生徒が学級や学校生活の充実・向上を目指して、自分たちの力で諸問題の解決に向けて具体的な活動を実践することを意味します。そのため、特別活動では、生徒の発意・発想を重視しながら「なすことによって学ぶ」を方法原理としています。

次期学習指導要領を見据えた論点整理には、「自らの人生を舵取りすることができる　民主的で持続可能な社会の創り手　をみんなで育む」という、改定の基盤となる考え方が示されました。これからの時代を生きる力として、生徒に社会参画に対する意識の高揚を図り、合意形成に関わる自治的な能力を育むことが、これまで以上に求められます。

（西部教育事務所）

実践へつなげるために

部長　山本　隆資

今年度は、令和６年度から引き続き「学級活動を通して身に付けるべき資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。」を研究主題とし、副題に「話合い活動を通して合意形成や意思決定し、粘り強く実践できる生徒の育成を目指して」を掲げました。特に、生徒が実践につなげるための話合い活動の充実を目指して、１年間の研修に取り組みました。

第69回研究大会では、東部地区は富山市立山室中学校、西部地区は砺波市立出町中学校を会場として研究大会を開催することができました。授業では、生徒が自分の考えを整理し、仲間の意見を受け止めながら合意形成に向けて粘り強く話し合う姿が見られ、参観者からも生徒の関わりの深さが評価されました。

山室中では思考ツール（Ｙチャート）を活用した視覚的な支援によって、生徒が議題について多面的・多角的に捉え、活発に意見交換をしていました。学校生活のルールを自分事として捉え、主体的に考えることを通して、実際に校則の提案を行うという実践的な学びにつながっていました。出町中では事前アンケートの結果を分析し、学級の実態に基づいた題材設定を行ったことで、生徒自身が課題を自分事として捉え、グループや学級全体の話合いに自分の考えをもって臨むことができました。

一方で、生徒が意見の根拠を深めるための教師の支援や、話合い後の振り返りの質を高める工夫等、教師の関わり方にはまだ改善の余地があります。話合い活動の目的や見通しをより明確に示し、生徒が主体的に参画できる環境を整えることが、次年度につながる研究課題であると感じています。

今年度の成果と課題を踏まえ、来年度は、生徒が課題を自分事として捉え、合意した内容を粘り強く実践していくために必要な教師の指導や支援のあり方について、さらに研修を深めていきたいと思います。

（高・伏木中）

第69回 富山県中学校教育課程研究大会
東部地区（富山市立山室中学校）

東部地区大会では、富山市立山室中学校を会場として、室林潤一教諭、上子千尋教諭、高尾尚多教諭による研究授業が行われた。ここでは、３つの授業の概要と指導助言について報告する。

（第１学年）　室林　潤一　教諭
題材名「学校生活の見直し」を考える

生徒の司会･運営により、学校や生徒、保護者、地域の視点から校則の改善に向けた実行可能なアイディアについて話合いが行われた。校則について多角的に話合いを進める中で、「社会に出ると制服も決まっているため、靴下もそろえるべき」との規範意識を念頭に置いて、発言する姿や自分と異なる意見を聞き解決策を模索する様子がみられた。

部会協議では、「思考ツールとしてYチャートを活用したことで、生徒の多様な意見を引き出すことができた」「校則の意義について、社会に出た際の視点で語ることができていた」「本時のゴールを事前に示すことで、よりよい合意形成につながったのではないか」といった意見が挙げられた。

谷口久代指導主事（東部教育事務所）からは、「生徒一人一人が自発的・自治的な学級や学校の生活づくりを実感できるよう、学級活動（1）における学習過程を意識し、その資質・能力の育成を図ることが大切である」などの助言をいただいた。

岡﨑翔太郎（下・朝日中）

（第２学年）　上子　千尋　教諭
題材名「学校生活の見直し」を考える

学校生活の中での「困りごと」を取り入れた学習課題を設定したことで、生徒に自分ごととして考えさせる工夫がなされた授業だった。事前アンケートで出た生徒の意見は、「生徒目線」「保護者目線」「教員目線」の３つに整理され、グループ討議では多角的な視点から主体的な話合いが行われていた。生徒主体で授業が進行されるよう、事前準備がしっかりと行われており、教師は終始生徒の様子を見守っていた。

部会協議では「活発な意見が出ており、生徒の主体性がよく出ていた」「クラスの意見が多数決で１つに決定していたが、１つに絞らないように、少数意見を大事にした合意形成を図ればよかった」等の意見が出た。

中島毅指導主事（東部教育事務所）からは、「自分たちの困りごとを自分たちで解決する話合いを通して互いの思いを尊重する態度を養うことは、よりよい人間関係を築くことにつながる」「互いの思いを十分に聴き合うには、少人数で予め話し合っておいたり、提案項目を選択しておいたりすることもできる」などの助言をいただいた。

山本　　練（魚・東部中）

（第３学年）　高尾　尚多　教諭
題材名「学校生活の見直し」を考える

生徒が自由に話し合い、互いに認め合う温かな雰囲気で、話合いが進められた。中学校生活を送る中で、当たり前の存在であった「学校のきまり」に問題意識をもち、学校生活をよりよくするために、学校のきまりに取り入れたらよいと考える案を各班で共有し、クラスとして生徒会執行部にどのような案を提案するのか、合意形成が図られていた。

授業の導入では、Ｙチャートというまとめ方を使い、各班で話合いが行われた。生徒、先生（学校）、保護者（地域）のそれぞれの立場で意見を出された。先生や保護者の立場で、自分たちの意見を考えることで、独りよがりな意見ではなく、多面的・多角的な立場で、「学校のきまり」を深く考えることができた。

部会協議では、「Ｙチャートが効果的に使用されていた」「司会者を中心に生徒が主体となって、話合いが進められた」「クラスの提案事項をまとめる際に、クラスの合意形成を図る上で、クラス一人一人の意見が反映されていた案であったか、クラス一人一人の総意をまとめるには、もう少し議論する時間が必要だったのではないか」等の意見が挙げられた。

吉田和央指導主事（東部教育事務所）からは、「校則の改善策を生徒自身が見付けることや、自分の考えを述べたり他者の考えを聞いたりして考えを深め修正する過程で、互いを認め、よさを生かすことが実現していた。それは特別活動の視点である『社会参画』『人間関係形成』に必要な資質・能力の育成にもつながる。今後、決めたことの実践や振り返りの中で、『自己実現』においても同様に必要な資質・能力の育成を図っていくことが期待される」などの助言をいただいた。

奥村　翔太（滑・滑川中）

第69回 富山県中学校教育課程研究大会
西部地区（砺波市立出町中学校）

西部地区大会では、砺波市立出町中学校を会場として、大西将也教諭と宮本一輝教諭による研究授業が行われた。ここでは、２つの授業の概要と指導助言について報告する。

（第１学年）　大西　将也　教諭

題材名　将来の自分の姿をイメージして、具体的な行動目標を設定しよう

９月に実施した「働く方へのインタビュー」や発表会の振り返り、キャリアパスポートを活用した振り返りを通して、これまでの学びを生かした活動が展開されていた。「将来の自分の姿を意識した、具体的な行動目標」を設定するために、周りの仲間との意見交換を通して考えを深める姿が見られた。

部会協議では、「生徒の話合いが活発に行われており、良好な人間関係が伺えた」「ワークシートを基に、個で考えを深める時間がきちんと設定されていた」等の意見が挙げられた。

立野文州指導主事(西部教育事務所)からは、「主体的に行動目標を決定することができるように、『つかむ』『さぐる』『見つける』『決める』の流れに沿った授業展開を意識する」「自己実現を図るためには、行動目標を立てることの必要性を生徒自身が実感することが大事である。そのために課題を吟味する必要がある」「振り返りやまとめは自分の考えをメタ認知する場である。他者の考えを全体に投げかけることで、個々の考えの深まりにつながる」等の助言をいただいた。

髙田　武志（射・大門中）

（第２学年）　宮本　一輝　教諭

題材名　「14歳の挑戦」の経験を、学校生活に生かそう

導入では、事前アンケートの結果を振り返り、活動を通して身に付けたい力や今の自分に足りない力を確認することで、話合い活動が円滑に行われるように工夫されていた。また、話合い活動では、違う業種を体験した生徒と話し合えるよう、意図的にグループが組まれており、様々な視点の意見に触れて、活発に意見交換をする姿が見られた。

部会協議では、「話合いの中で、教師が『なぜ』と問いかけることで、生徒が深く考えることができていた」「アンケート結果は課題意識を高めることに有効ではあるが、提示するものを絞ることで、生徒の本音を引き出しやすくなるのではないか」等の意見が挙げられた。

村田夏樹指導主事（西部教育事務所）からは、「教師自身の実体験を語ることによって、生徒の将来への意識を高めることができる」「キャリアパスポートや総合的な学習の時間のファイル等を授業で活用することで、生徒の学びをつないでいく工夫が大切である」等の助言をいただいた。

岩崎　和寛（南・福野中）

学級活動の指導のポイント

越谷市教育センター　教育指導員･千葉経済大学　非常勤講師　木場　真理

１　生徒の居場所をつくるために

歌舞伎町の東横、道頓堀のグリ下等には、家庭や学校に居場所がなく、人とのつながりを求めている生徒が集まっている。そして、不適切なつながりができ、犯罪に巻き込まれてしまう。このような問題を解決するために、学校には、人との正しいつながり方を教えることと居場所づくりに取り組むことが求められている。そして、この問題の解決のために、特別活動が果たす役割が非常に大きいと考える。

２「集団活動は諸刃の剣である」

特別活動を通して、よりよい集団づくりを進めていく中で、結果ばかりにこだわらないようにする必要がある。良好な人間関係や、望ましい集団をつくることでいじめや不登校がなくなると言われているが、一歩間違えるといじめや不登校を助長する活動になってしまう。特に学校行事に向けた活動では注意する必要がある。結果よりも過程に注目して指導することが大切である。

３　自発的・自治的な活動の範囲

学級活動は、（１）学級や学校における生活づくりへの参画が中心である。なぜなら、集団の中で話し合い、合意形成し、実行するという経験が、大人になったときに大きな意味をもつことになるからである。学級や学校における生活上の諸問題について話し合い、解決策を見いだしたり、学級内での係活動に意味をもたせたりすることが、自発的・自治的な活動に繋がる。集団生活では様々な問題の発生が予想されるが、それらの問題全てが学級における合意形成に適しているわけではない。生徒の自発的・自治的な活動にするために生徒に任せる場面は絶対に必要であるが、生徒に任せることのできない条件を明確にしておく必要がある。例えば、個人情報やプライバシーの問題、相手を傷付けるような結果が予想される問題、教育課程の変更に関わる問題､校内のきまりや施設･設備の利用の変更等に関わる問題、金銭の徴収に関わる問題等が考えられる。

４　三段階討議法について

よりよい合意形成をするために、三段階討議法がよく使われる。意見を出し合い、比べ合い、まとめる（決める）の三段階を意識して話合いを進める方法である。その中でも比べ合う段階では、提案理由に沿った根拠を比べる必要がある。そうすることで、よりよい合意形成ができる。教師の助言も大きな役割を果たす。押しつけではなく、一緒に考えるスタンスで助言するのは合意形成を図る上で効果的に働く。

笹木　邦紘（氷・西條中)